

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

灯火ーともしびー

【作者名】

桜庭まこと

【あらすじ】

未来を望む心。

たどる道の険しさは知っていても、進むことをあきらめなければ、いつか、きっと。

雁の大学にて、 楽俊独白。

第一話

指先から飛びたつた鳥は、美しい尾羽をはためかせて幾度か円を描くと、まっすぐ西を目指して飛び去った。

それを気をつけてなと見送つて、窓を閉める。
開いたままだつた書籍を棚に戻して椅子に背を預け、鼻先で天井を仰ぐ。

斜陽の加減で、やらめく細い髪が茜に染まつた。
鮮やかなその色は、遙か西方の少女を思わせる。

雁にやるくらいなら慶に欲しいと言つたのだけれど、楽俊は巧に戻るのかな。

いつか聞いた、少女の柔らかい声が甦る。
王として立つても、自分の意思を伝えるときはあいかわらず控えめなのが好ましかつた。

「慶に、か……」

彼女が言外に載せた意味に気付かないほど、鈍くはない。
だが、その言葉に対する返事を、自分は未だに伝えられていなかつた。

陽子には恩義がある。

それにもまして、一人の友として彼女の力になりたかつた。

大学に入ることは自分の目標であり、僅かな旅とはいえ苦楽を共にした友の支えになるための手段。
けれど、といつも逡巡する。

慶の民ならば、ただの人であれば、それはたやすいことだつたらう。
一つは駄目でも、そのどちらかであるならば、あるいはまだ容易なはずだつた。

でも、自分は巧国の人、半獸で。

雁であれまた他の国であればともかく、よつて王を書じよつとした巧の、しかも半獸とは。

雁が半獸に暮らし易い国であるといつのは周知の事実。

裏を返せばそれは、他の国ではまだまだ差別があるといつのだ。慶は波乱の国。

そしてそれゆえか、民には頑ななまでに因習にこだわる氣質がある。

王が異を嫌つた巧ほど露骨ではないが、やはり半獸が公にあるを好みない。

陽子が勅令をもつて差別を撤廃するまで、半獸は官吏になることは出来なかつた。

勅令でなければ動かないほど、それは深く人心に根付いた偏見。

慶の朝は新王を迎えたばかりだ。そのうえ陽子は若く、まだこぢらのことによく知らぬ。

懐達と云い、王をすり巻きにするよつた宮の中で、彼女がどれだけ苦心してこらかなど、想像に難くない。

そんなにこゝに他國の半獸が出しゃばつたりしたら、陽子はどうなる。

灰茶の毛並みを撫でつけて、息を吐いた。

「この姿に生まれついたのは、べつにおこらのせいじゃねえ

かつて陽子にそう言つたのは、ほかならぬ自分自身。

あのときは、海客というだけで生存すら否定されていた彼女に、前を向いて欲しい一心だった。

生まれてきたからには、誰にだって生きていぐ価値があると、たとえ海客だつて命にかわりはないんだと胸を張つて欲しかつた。

それをいまになつて、自分に言い聞かせる羽目になるとは。

自分が半獸なのも、巧に生れたのも、すべては天意のなせることが。

天帝が何を思つてこの身を定めたのか、知るよしもない。だが一つだけわかつてゐる。

自分が巧の半獸に生まれなければ、陽子の手を取ることも、出会いことすらなかつた。

それは、くつかえ覆しようのない事実。

もつて生まれた天命が何處いすくにあるかなど、樂俊にもわからぬ。だが、真実望み信じて行なえば、それは天意をも動かしうる力になる。

すくなくとも、自分はそう思つてゐるから。

いつか。

急速に暮れゆく黄昏の最後の一朧が、小さな部屋の中を照りひす。

まだ、答えられねえけど、いつかきっと。

日を射るような朱の光に、樂俊は臉を閉じた。
せめて身につけうる限りの知識と、表立つては非難されぬだけの立場をもつて。

ほかの誰でもない、彼女を護るために。

「だから、陽子。もつちよつとおいらに時間をくれな」

それくらいなら、待つてもらつてもいいだろ？

我ながら情けねえなあと苦笑つたところに、扉が叩かれた。

「文張、飯食いに行こつぜ」

隙間から首だけ出した同輩が、のんびりと頷いた部屋の主にびしりと指を突きつけた。

「それと、飯のあとそのまま射場にいくからな。さつあと着替えるよ」

「ええ？ 飯食つてすぐか？」

「行つたり来たりじゃ面倒だらうが。早くしないと飯食いつぱぐれちまつぞ！」

物言いは悪いが氣のいい友人に、思わず笑みが零れる。

「へいへい。せいぜい急ぐとするよ」

「せいぜいじゃない、全力で急げ！」

どこの麒麟にも似た威勢の良さに破顔する。

な？　いい奴だろ、陽子。

衝立の陰で着物を身に着けながら、彼方の友に向かつて自慢した。機会があつたら会わせてみたいもんだと思いながら、部屋を出る。その背を、小さな銀砂のような明星が照らしていた。

初稿・2004・12・20